

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 90 号 平成 30 年 11 月 20 日
編集・発行 神戸市立中央図書館
〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



震災当時の写真を見る子供（左上）／開会宣言をする松原氏（右上）／募金活動の様子（右下）
(COMING KOBE ホームページより)

毎年五月頃になると、中央区ではチャリティーロックフェスティバル「COMING KOBE」、通称「カミコベ」が開催されます。入場無料、総勢百組以上が出演する大型のフェスで、募金やグッズの収益にて被災地支援やイベント運営を行っています。

市内でライブハウスを経営する松原裕氏が、震災後に各地で励ましの声をもらったことをきっかけに発案し、「阪神・淡路大震災を風化させず語り継ぎ、神戸を活性化させる」をテーマに、平成十七年からスタートしました。

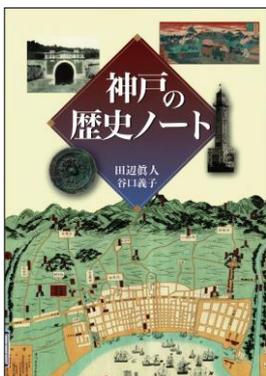
『奇跡のロックフェス COMING KOBE』（小野田金司著）では、イベント開始から十年で、入場者四万人超えに至るまでの軌跡や、東日本大震災の年に、岩手県盛岡市内で会場の様子を生中継し、被災地に音楽の力を届けたエピソードも紹介されています。その取り組みに対して、平成二十五年には神戸市文化奨励賞を受賞した「カミコベ」。震災の記憶とボランティア精神は、音楽とフェスの思い出と共に受け継がれていくことでしょう。

カミコベ
COMING KOBE

頼介伝 松原隆一郎（苦楽堂）

社会経済学者である著者が、神戸の実家を整理中に見つけた写真をきっかけに、大正・昭和を生きた祖父・頼介の生涯を探った。資料を調べ、古老に話を聞き、七十年前の写真撮影場所を突き止め、頼介の足跡に迫る。頼介は防水帆布の製造と満州への輸出で財をなすが、所有した船のほとんどを戦争で失った。戦後は製鉄業に転身し、会社を大きくした。

著者は頼介の成功と晩年の経営破綻の理由を考察。不確実性を背負って起業する野心家たちであふれた町の活力、業界の浮沈がもたらした影響などを分析し、近現代の神戸の姿を描き出している。



神戸の歴史ノート 田辺真人 谷口義子（神戸新聞総合出版センター）

地図、図版、コラムを豊富に交え、コンパクトに神戸の歴史を解説する。通史として基本情報をしつかり押さえながら、幕末・明治初期の各村の領主、石高の一覧や伊能忠敬の測量行程など、専門的な情報も織り交ぜられ、知識が深まり、興味の幅が広がる。

各章の最後に自修ノートという小テストがあり、読み飛ばさせない工夫もある。家庭に一冊あれば、子供から大人まで楽しく学べる。

聴竹居―発見と再生の22年 松隈章（ぴあ株式会社関西支社）

京都府大山崎町に建つ建築家・藤井厚二の自邸「聴竹居」。環境共生住宅の原点といわれ、「日本の住宅」「木造モダンイズム建築」の代表格のひとつである。

藤井はかつて竹中工務店に在籍し、様々な名建築を手掛けた。そして現在竹中工務店に勤める著者は、阪神・淡路大震災をきっかけに「聴竹居」と出会う。この名作住宅を次代に残そうと、保存・維持活動の体制を作り上げるまでの歩みを丹念に綴っている。

北野『雑居地』ものがたり 北野

『雑居地』ものがたり執筆・編集委員会（こうべ北野町山本通伝統的建造物保存会）

神戸の山麓、外国人と日本人がともに暮らした北野の歴史を、古地図や豊富な写真を使い分かりやすく解説している。

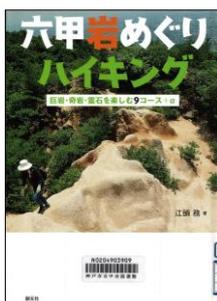
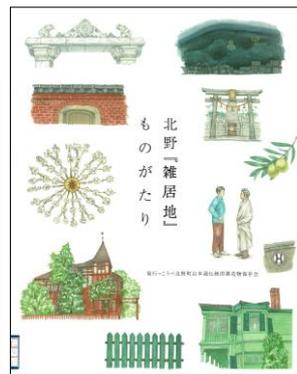
「古代から近世の山手・北野」「北野の神社」「風見鶏の館と池」「ヴォーリズが設計した北野の洋館」など話題が尽きない。北野村の末裔・西脇家の蔵から発見された貴重な地図も紹介されていて興味深い。

六甲岩めぐりハイキング―巨岩・奇岩・霊石を楽しむ9コース+α

江頭務（創元社）

登山を趣味とし、六甲山系の岩を調査研究する著者による、岩に焦点を当てたハイキングガイド。伝承や古い地誌に現れる岩や、信仰の対象とされる霊石、ユニークな形の奇岩などを紹介しながら、それらを巡る九つのコースを案内。

さらに「弁天岩の雨乞い伝説」や「清盛の涼み岩」といった、岩にまつわる興味深い挿話も別立てのコラムで詳しく語られる。



空襲・疎開・動員―戦時・戦後の神戸の社会と教育 洲脇一郎（みるめ書房）

空襲、学童疎開、勤労動員があった中、生徒の日常や教育活動はどのようなものだったのか、戦中戦後の神戸で人はどう生きたのか、記録調査に基づいて論じた。

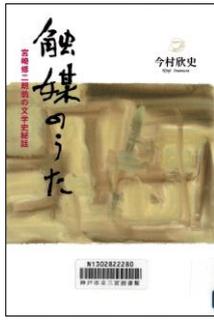
著者は『神戸市史』編纂に携わった時の資料に加え、疎開日誌や学校日誌といった生の記録を調べることで、より鮮明に当時の様子を明らかにした。

米軍の調査報告からみた神戸空襲、教師たちの戦後の姿、注射禍事件や神戸中華同文学校問題など、これまであまり語られていない内容があるのも貴重。

触媒のうた―宮崎修二郎翁の文学史
秘話 今村欣史（神戸新聞総合出版センター）

「のじぎく文庫」の創設など、兵庫文壇に足跡を残す宮崎修二郎。彼の口から語られた文学者たちの秘話を、詩人で喫茶店の店主でもある著者が、雑誌・月刊『KOB E C C O』に連載したものを一冊の本にまとめた。

師弟のような同志のような二人のやり取りから生まれるひとときの文学談義を読むと、宮崎氏と交流のあった柳田國男・陳舜臣・富田碎花などそうそうたる作家たちが身近に感じられる。著者は旅に出てエピソードを裏付けるための調査も行っている。



シヨコレティエ 藤野恵美（光文社）

事故で父親を亡くした聖太郎と、製菓会社の社長子息、光博。一九八五年、小学校の同級生の二人は、光博の誕生日会をきっかけに親しくなる。お菓子作りへの情熱を同じくする彼らだったが、時とともにお互いの境遇や才能の差に戸惑うようになってゆく。

二人の葛藤と成長を、神戸の街やできごとに絡めて描いた物語。人生の転機に登場するチョコレートやケーキなどの描写は丁寧で、同じものを食べてみたくなるほど。

大阪・神戸わがまちゆかりの偉人
自然総研トイロ倶楽部編（自然総研）

実業家・芸術家・学者・政治家・その他の五つの分野に分け、六十一人を紹介する。顔ぶれは、おもに明治以降に活躍し、朝ドラの主人公になったなど話題性のある人物たち。

神戸ゆかりの偉人では、鈴木商店の番頭金子直吉や映画評論家淀川長治ら約二十人。巻末には記念館や美術館など関連施設の紹介を載せる。

!!その他の新刊!!

ひょうごの駅 兵庫県民共済生活協同組合編集・発行
人の心を耕す 黒田和生（カンゼン）

発達障害の暮らし日記―マンガ&エッセー 森山和泉（神戸新聞総合出版センター）
ビジョンの狩人 神戸市役所センター合唱団ほか編著（クリエイツかもがわ）

神戸 その⑭
あんな人こんな人

亀高文子 かめたか・ふみこ

明治19年(1886) ~ 昭和52年(1977)

亀高文子は、横浜の画家の家に生まれました。明治35年に東京の女子美術学校に入学し、卒業後は、太平洋画会研究所にて希少な女性画家として研鑽を積みました。明治43年に結婚しますが、夫の早世により、幼い2児を抱えた生活を余儀なくされ、広告・さし絵の職で、家族の生活を支えました。しかし、23歳で入選して以来、文展（文部省美術展覧会）には欠かさず出品を続け、大正7年、東洋汽船会社の船長であった亀高五市と再婚。その後、与謝野晶子が命名した「朱葉会」（女性だけの美術団体）の創設に参加し、洋画家としての地位を確立していきました。

大正12年、文子は五市の転勤にともない、神戸市熊内町に転居します。県会議事堂で最初の個展を開き、兵庫・神戸の画壇に大きな刺激を与えました。昭和元年、赤艸社女子絵画研究所を創立、後進の指導にも力を入れました。五市がアトリエ横に建てたモダンな住宅は「亀高ホテル」と名付けられるほど多くの客人を迎えたといえます。小出檜重など画家たちが集い、関東からは文子の師・満谷国四郎、会津八一などが訪れ、藤島武二の来神時には、小磯良平らとともに、藤島を自邸に滞在させました。戦後、文子は西宮市に居を移し、赤艸社を再開しました。物柔らかでしかも毅然とした女性洋画家の先駆者は、亡くなる一週間前まで絵を描き続けていたといえます。



参考文献：『亀高文子とその周辺』辻智美編 神戸市立小磯記念美術館
画像：「亀高文子」『わが心の自叙伝（1）』のじぎく文庫

有馬千軒 江戸時代の有馬

有馬温泉の歴史は古く、『日本書紀』にもその名がみられます。京、大阪に近く良質の温泉が湧く有馬には、古代から天皇や公家、文人たちが多く訪れ、太閤秀吉が度々入湯したことでも有名です。江戸時代に入ると、庶民も社寺参詣や湯治と称して観光旅行をするようになり、江戸後期には「有馬千軒」とうたわれるほどの賑わいをみせます。

有馬の宿は鎌倉時代の初め、中興の僧・仁西が、薬師寺（温泉寺）を改修し、薬師如来の守護神である十二神将にちなんで、十二坊舎を建立したのが始まりとされています。有馬の旅館に「坊」とつく名前が多いのはこの名残だといわれています。秀吉の頃に二十坊になり、湯治客が急激に増えた江戸時代には二十坊に属する小宿が次々とつくられました。江戸時代には、宿に「内湯」がなく、町内に「元湯」が一か所あるだけで、すべての湯治客が元湯に入りました。浴槽を真ん中で仕切り、南側を「一之湯」、北側を「二之湯」

と呼び、使用は十坊ずつ割り当てられていました。

入湯制度には、貸切の「定幕湯」、他の宿の客と一緒に「合幕」などがあり、定幕湯は各宿の印の幕を、合幕は藍地に「合幕」と白抜きした幕を入口にかけて区別しました。

浴槽は、横一丈二尺五寸（3.8メートル）、縦一丈三尺二寸（4.0メートル）とほぼ正方形で、深さは三尺八寸（1.15メートル）。底は敷石で間に竹筒を挟み、筒から湯が湧きでるようになっていました。



合幕男女入込湯の図 (『滑稽有馬紀行』より)

『滑稽有馬紀行』（一八二七）に入湯の様子が描かれています。

「合幕の男女大ぜい入湯する。尤おとこはふどし、女はゆぐ（湯具）なりに、湯の中へ入るなり。（中略）常体の人さへ肩までありて、男女共に立ながら入湯するなり。」

浴場は混雑していて、深さがあり立って入っていたようです。主人公の一人才六は、「はなはだの小男」で口の中へ湯が入らないようつま先立ちをして用心しています。旅仲間からかわれた拍子に溺れかけ、周りの人に助けられてもう羽目に陥ります。



有馬湯女の図 (同上)

二十坊あった宿ごとに老若二人の湯女がいました。四十から五十五歳までを、大湯女、十三から二十三歳までを、小湯女と呼び、小湯女は坊ごとに「通り名」がありました。湯女は入浴の時間を知らせ浴場に案内し、入浴中は衣服や履物を預かるなど湯治客の世話をしました。また、酒宴にもよばれ、「有馬ぶし」を唄ったり舞いを披露したり、その様子は古風で優雅だと喜ばれました。

湯女の唄う有馬ぶしは、最も古いとされている「松になりたや有馬の松に藤に巻かれて寝とござる」ほか多様な歌詞が文献に残されています。



『ありまぶし』 唄本が板行され湯治客の土産に配られていたようです。

国学者・本居大平の紀行文『有馬日記』（一七八二）に、滞在の様子が細やかに記されています。余暇には寺社に参ったり、鼓ヶ滝や落葉山など名所へ行楽に出かけたり、相撲見物もしました。雨の日は「しめやかにこもりゐて、ゐご（囲碁）、すごろく、将棋などいふたはぶれにかりて、つれづれ」とあります。湯治客同士の交流も随所に描かれています。有馬に着いた大平は先客の老人に、「ここに来る人は皆どこか病んでいるのだから、打ちとけて心安く過ごそうと声をかけられ、その親身な心遣いに「旅の空にてはことにたのもしうおぼゆ」と心強く思います。この後、老人をはじめ湯治場で知り合った人たちと交流を深め二十日間を過ごします。長期に及ぶ湯治では、共に過ごす人たちとの交流が大きな楽しみだったようです。

老人や他の客と誘い合って鼓ヶ滝へ出かける場面では、持参した酒と肴で宴が始まり、歌を詠みあい三味線を弾く、有馬が心身を癒す別天地であったことが感じられる光景です。

参考文献

『有馬温泉史話』小沢清躬（五典書院）、『滑稽有馬紀行』と『有馬日記』は『江戸温泉紀行』坂坂耀子編（平凡社）に所収